



# 妹はLサイズ！

巽 飛呂彦

illustration ©みついまな

美少女文庫  
FRANCE & SHOIN



# I 妹はしサイズ！ おつきなつたらけっこんして♥

『わーん！ お兄ちゃんっ、さえな、ころんじやったよおー』

『お兄ちゃん！ さえな、おしっこ出ちゃった……』

『ね、お兄ちゃん？ そのキャラメル、ちようだい』  
みくりやとしや

御厨寿也の後ろをいつもくつついてくる妹、紗英菜。  
さえな

ちっちゃくて、泣き虫で、甘えん坊で……。

その小さな手を握ると、紅葉もみじみたいなぶにぶにした手でしっかり握りかえしてくる。だから犬に吠えられて大泣きしたときも、泣きすぎて鼻水が垂れちゃったときも、おしっこが漏れてパンツが濡れてしまったことも、寿也は、あーあ、と思いながら、でもそんなにイヤじゃなくて、妹の鼻水を拭いてやり、涙をぬぐってやって、パンツを脱がせてトイレに連れて行ってやった。

『……お兄ちゃん、怒ってない？』

『怒ってるわけないよ』

『よかった！』

安心したのか、握っている紗英菜の手のひらが少し熱くなったように感じた。紗英菜は子犬のように兄にくつつきながら、

『お兄ちゃん、さえなのこと……好き？』

『え？ うん』

妹が嫌いな兄なんているもんか。

そうつぶけようとするより先に、紗英菜が飛びついてきた。

『お兄ちゃん、大好き！　だーい好き！』

『お、おい』

熱すぎる妹の体温が、タオル地みたいなワンピースを通して伝わってくる。同時にミルクと汗が混じったような、子供っぽい匂いがした。

『さえな、お兄ちゃんのお嫁さんになりたいな』

そんな無邪気な言葉に、寿也は妹の頭をなでて、

『そうだな。紗英菜が大きくなったらな』

『ほんとう？　じゃあさえな、大きくなる！　早く大きくなって、お兄ちゃんとけっ

こんするの！』

『けっこ……ん、て』

『約束だもん！ ね、お兄ちゃん、約束だよ。さえな、大きくなったら、けっこんして、お兄ちゃんのお嫁さんになるの』

紗英菜は大きな目で、寿也の顔を見つめる。

結婚。お嫁さん。花嫁……。

ふわふわして甘くて、とりとめのないそんな言葉。

『大きくなったら、だぞ。だからご飯も好き嫌いしないで、なんでも食べて大きくならないとな』

寿也は笑いながらうなずいて、三歳年下の妹の手をいっそう強く握った。

夕焼けがびっくりするほど赤くて、紗英菜の髪も顔も、オレンジ色に染めていた。

それは十年前の夏の日……。

「きゃあああああゝ!!」

リビングに響き渡る悲鳴。それと同時にソファアーの上の紗英菜が抱きついてきた。しかし寿也の口からもれたのは、まるで全身羽交い締めとチョークスリーパーをいっしょに受けたような圧力と痛みによるうめきだった。

「むぐぐ！ は、離れろ、紗英菜、苦し……い」

体中を締めつけるのは紗英菜の長い手脚だけではない。寿也の口を塞ぐように押しつけられたバスト。まさに凶器だ。

「あ！ お兄ちゃん！ だ、だいじょうぶ!?」

あわてて紗英菜が離れる。

とたん、タンクトップに包まれたバストがぼよん、と揺れた。

寿也はハアハアと大きく息を吸いこむ。

「い、息ができない。死ぬとこだったぞ」

「ごめんなさい！ お兄ちゃん。でも……」

さっきから急に激しくなりだした、稲光<sup>いなびかり</sup>。

ソファーに並んでいっしょにテレビを見ていた寿也と紗英菜だったが、稲妻が光るたびに紗英菜が飛びあがり、ついに近くに落ちて寿也に抱きついてきたのだ。

言っている間にも暗闇に浮かびあがる青白い光は、不意に大きなベランダの窓いっぱいにもまぶしく輝いた。と思うと脳天めがけて落ちてくるような轟音。

「きゃあああっ！」

ふたたび飛びついてくる紗英菜を押しとどめることもできず、ボディスラムよろしく押しつぶされる寿也。

